# 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響

学校教育専攻
教育臨床コース
嶋田　美由紀

指導教官　田中　雄三

## 1．問題と目的

アタッチメントは、乳幼児期だけでなく、生涯にわたって対人的経験や対人的行動に関与するものとして提言され、内的作業モデルの概念により、青年期や成人期のアタッチメントの問題が取り上げられるようになってきた。Bowlbyは内的作業モデルはその基礎が幼少期に形成され、その後は比較的変化することなく持続する傾向があるとした。しかし近年、青年期以降において、内的作業モデルの修正、変化の可能性を指摘する研究も多く見られるようになってきている。

そこで本研究では、大学生を対象として青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響について検討することを目的とする。

## 2．研究の対象と方法

大学生285名（男子62名、女子223名）を対象に、2002年6月下旬から同年7月上旬にかけて質問紙調査を実施した。質問紙は「幼少期のAttachment尺度」（青柳・酒井, 1997）、「内的作業モデル尺度」（詫摩・戸田, 1988）、「対人関係についての質問項目」（山岸, 1997を参考に筆者が作成）を用いた。

## 3．結果

「幼少期のAttachment尺度」の因子分析を行ったところ2因子が抽出され、第1因子を「安定」、第2因子を「アンビバレント」と命名した。2因子間には有意な負の相関が認められた（$p<.01$）。「内的作業モデル尺度」の因子分析を行ったところ3因子が抽出され、第1因子を「secure」、第2因子を「ambivalent」、第3因子を「avoidant」と命名した。「secure」と「ambivalent」、「secure」と「avoidant」の間に有意な負の相関が認められた（$p<.01$, $p<.01$）。また、「ambivalent」と「avoidant」の間に有意な正の相関が認められた（$p<.01$）。各下位尺度について、男女の得点を比較したところ、いずれの下位尺度についても男女間に有意な差は認められなかった。

各下位尺度間の相関をみたところ、「安定」と「secure」の間に有意な正の相関が見られ、「安定」と「avoidant」の間に有意な負の相関が見られた（$p<.01$, $p<.01$）。「アンビバレント」と「avoidant」の間には有意な正の相関が見られた（$p<.01$）。また、幼少期のAttachment尺度得点の上位下位群間で内的作業モデル尺度得点を比較したところ、「安定」得点について、上位群は下位群よりも「avoidant」得点が低く、「secure」得点が高かった（$p<.05$, $p<.10$）。「アンビバレント」得点については、上位群は下位群よりも「avoidant」得点が高く、また「ambivalent」得点も高かった（$p<.01$, $p<.05$）。

中学生の時から現時点までに、他者との関係によって自分に何らかの変化があったとする者は、全体の80％以上を占めていた。変化をもたらすきっかけになった他者は、「友人」「恋人」

「学校の先生」が全体の約 80％を占めていた。変化の評価をポジティブなものとして捉えていた者が全体の 80％を占め、変化の内容は「自信・積極性の獲得」「柔軟性・多様性の受容」「思いやり・やさしさの獲得」「自己の受容」「他者への信頼感の獲得」「他者への不信」「自信の喪失」にまとめられた。

幼少期のアタッチメントの安定が低かった者を内的作業モデルの安定が高い群と低い群に分け、青年期の対人関係を検討した結果、他者との関係により自分に何らかの変化があったと回答した者は、内的作業モデル尺度の安定が高い群で多かった（$p<.05$）。また、安定の高い群の方が変化の評価をポジティブなものとして捉えていることが多かった。変化の内容については、高い群で「自信・積極性の獲得」の割合が高かった。幼少期のアタッチメントの安定が高かった者についても内的作業モデルの安定が高い群と低い群に分け、青年期の対人関係を検討したところ、変化の評価について、ネガティブなものとして捉えている者は内的作業モデルの安定が低い群に多く、ポジティブなものとして捉えている者は高い群に多かった（$p<.05$, $p<.10$）。安定が高い群では変化の内容の「自信・積極性の獲得」の割合が高かった。

## 4．考察

「幼少期の Attachment 尺度」の２因子は、ともにアタッチメントの側面ではあるが、異なった側面を捉えていると考えられる。「内的作業モデル尺度」の３因子は、ambivalent と avoidant は、異なった愛着スタイルでありながら、insecure（不安定）という意味で両者の間に共通点があると考えられる。

本研究においては幼少期と現在の愛着スタイルにはいずれも性差が認められなかった。これは、対象の特性が影響していると考えられる。

下位尺度間の相関と、幼少期の Attachment 尺度得点の上位下位群間で内的作業モデル尺度得点を比較した結果からは、幼少期の安定した愛着が青年期の他者との関係における安定した愛着スタイルに関連しており、幼少期の不安定な愛着が青年期の他者との関係における不安定な愛着スタイル（ambivalent、avoidant）に関連していることが示された。これはアタッチメントの連続性を支持する結果であると考えられる。

青年期の対人関係についての質問項目からは、青年期の対人関係の中で、様々な人と出会い相互交流の中で青年は影響を受け、自分の変化を感じていることが明らかになった。また、青年期の対人関係においては友人、恋人（異性関係）が重要であることが示された。また対象者の多くが教育大学の学生であることから「学校の先生」も重要な対象になったと考えられる。

幼少期のアタッチメントの安定が高かった者、低かった者をそれぞれ内的作業モデルの安定が高い群と低い群に分け、青年期の対人関係を検討した。その結果、他者との間で何らかの変化がもたらされるような体験をし、そこからもたらされた変化がポジティブなものとして認識されることによって幼少期の安定が低かった者でも内的作業モデルの安定が高くなる可能性が示唆された。また、幼少期のアタッチメントの安定が高かった者でも、その後の対人関係においてネガティブな体験をした場合、内的作業モデルの安定が低くなることも示唆されたと言えよう。その際、「自信・積極性の獲得」が大きな影響をおよぼすということが推察された。